
魔魅の子孫

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔魅の子孫

【Nコード】

N7360P

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

雪夜の町で兄弟は歩みを止めた。「寒いね……」「……うん」他の言葉が浮かばずに、繰り返し囁き合っていると――雪が、やんだ。「じゃあ、寒くないところに行く？」ファースリヤが二人を拾ったのは、何も偶然ではなかった。「魔物」の血を引くただ人たちの話。外部サイト「みくり」掲載作品です。

魔魅の子孫 1

くき、くき、と一足ごとに雪が鳴る。靴の中はとうに水浸しなのに、一足ごとに爪先が初めてのように凍てついて、いつそ途切れてほしい意識を意地悪く繋ぎ止めている。服を少しずつ染めていく白を、素手で払えば指が冷たく、袖で払えば袖が濡れ、払わずにいればしんと冷気が肌まで伝わった。暖かく着込んでいるわけでもないが、吹き曝しの顔や手や足首は、やはりそうでないところよりも冷えていた。

例えば一刻、このまま歩き続ければ、暖かくて乾いた場所にたどりつくというのなら、寒さ冷たさに耐えながら足を動かす甲斐もあるだろう。しかし実際にはどういう意味での当てもない。歩みを止めればどうなるかはほんやりした頭でも見当がつくけれど、止めなければどうにかなるわけでもなかった。

くき、くき。靴の下で雪が鳴る。一足ごとに爪先が砂糖をまぶしたようになっては、踏み出すと同時にその砂糖を散らす。右手を拳にして風を避けるように胸へ引き寄せ、左手には執念のようにもう一つの手を握り締めて、白い夜道を少年はひたすら進んだ。

「兄さん」

「ん」

「寒くない？」

気遣わしげな声が、握った手の向こうから聞こえた。

「おまえこそ」

自分と同じだけ、寒いはずだ。並んで歩く弟へ目を向けると、片手を袖の中へ、というよりも身頃の中まで、いつの間にか引っ込めていた。髪や肩に薄く積もりつつある雪を、きりが無いとも思いたいながら落としてやると、いいよ、と目を伏せたまま呟く。

「冷たいだろ」

「今さらだよ」

「俺だって、今さらだよ」

「……見てても冷たいんだよ」

くき、くき。動いていれば寒さは僅かでも紛れる。ほんの僅か。本当はどこか扉の前で立ち止まり、叩いて助けを乞うてみればよいのかもしれないが、もうそこまで頭は回らなかったし、壁と扉との区別がよくつかなかった。

不意に弟が躓いた。繋いだ手は離れなかったが支える余裕もなく、引つ張られて少年は片膝をついた。膝から下が一気に雪に埋まった。顔からまともに突っ込んだ弟は、小さな悲鳴を上げて上半身を起こし、服の中の手を流石に引き出してぱたと払い落とした。

それから——その手を、すんと落とした。

「もう……やだ」

座り込んだまま弟は呟いた。

「立ちたくない。やだ……」

立ったって、歩いたって、どこにも着かないじゃないか。どこまで行っただって、寒くなくも冷たくなくもならないじゃないか。

やだ、とだけ拗ねたように繰り返す弟が、元気であれば何と言ったかわかる気がした。

ややあって、少年はもう一方の膝をついた。後悔しそうな冷えがすぐに襲ってきたけれど、爪先に感じるような痛みはまだない。

「もう、いいことに、しょうか」

口に出した言葉が自分の耳に届くと、心を決めるより先に、体はそれを決定と受け取ったらしい。立ち上がるということが酷く億劫な、無理のある動きに急に思えた。

辛そうというよりも怒ったような顔で頷くと、弟はずるずると壁際に寄った。少年は風上に座った。生憎その周辺に扉はなかった。疲れきった足を伸ばし、腰と背を壁につけると大分楽になった。

弟は雪を避けるように足を畳んで、今度は右手を服の中へしまい込んでいた。外へ出したままの左手は、どうやら転んだ弾みに痛めたらしかった。

「手、大丈夫？」

「平気」

頑とした調子で答えた割には慎重に、その左手で弟は兄の手を取った。

「兄さん。ユアル」

「うん」

「寒い」

「そうだね」

齒が早くもかたかたと鳴り始めていた。動いているといないでは、やはり大分違うらしい。やっぱり歩こうか、とは、でも、言えない嫌なもの。また、立つなんて。

雪夜の町は静まり返って、遠くの物音が時折聞こえた。窓が開いて、すぐに閉まる。扉が開いて、誰かが小走りに動いて、戻って、扉が閉まる。誰かが急ぎ足で歩いていく。どこか、遠くで。自分たちと関わりない場所で。

とん、と。弟の頭が肩に当たった。鼻をすする気配があったから、意識をなくしたわけではない。いつしか閉じていた目を開けて、少年は先ほどのように、弟の髪から雪を払った。今さらだと、今度は言われなかった。

眠ってはいけない。まだ。弟に呼びかけられたときには、答えてやれなければいけないから。

「……兄さん」

大分経って、囁き声がした。

「うん」

「兄さん」

「うん。……聞いている」

「……兄さん……」

「いるよ。ここに」

おまえというよ。一緒に。どこに行くにも。

握った手はもう大して温かくもないけれど、指の動きが時々感じ

られた。肩に触れた頭を通じて、身じろぎも時々伝わってきた。

「……ソアル？」

「……ん……」

目覚めていれば、寒い。冷たい。意識を手放してしまった方がきつと楽だ。反応があったことに、それでもほっとする。

「……何？」

「……寒い、ね」

他の言葉が思い浮かばない。

「寒いね……」

「うん……寒い。……寒いよ」

微かな声。聞こえているのが奇跡のような。

それでも、聞こえる。声がする。だから、弟はここにいる。

聞こえるだろう。声がするだろう。だから、僕はここにいるよ。

寒いなんて、わかりきってる。そんな話をしたいんじゃない。確かめたいのは、ただ。

「さむい……ね……」

「うん……そうだね」

雪がやんだ。

「じゃあ、寒くないところに行く？」

何かとても場違いな気のする問いかけが、代わるように降ってきた。問いかけだということがすぐにはわからなかった。自分たちへのものであることも。

気づけば気づいたで、答えるのが大層面倒だった。無遠慮に踏み込まれたような感覚があった。答える。喋る。相手に届くだけの声で。相手の言葉に応じた言葉で。そんな、大変な、こと。

でも。自分でなければ、弟が。

かなりの努力を払わされているような気分になりながら、少年は大儀そうに瞼と顔を上げた。

爪先まである足も、指先まである腕も、優しく押さえつけるよう

な、頼もしい重み。春の夕焼け雲のような極上のけだが、掌も甲もふんわりとくるみ、口の上までを軽く覆っている。無意識に引つ張り上げたか、潜り込んだかしたらしい。柔らかい感触の包み込む手はしかし右だけで、左手は目の粗くない別の布の上にあった。見えでもないのに清潔な感じがした。

見慣れない天井を、ユアルは眺めていた。どこだろうとも何があったろうとも考えつかなかった。素肌に触れるけばがあまりに心地よくて、そこにばかり気を取られた。体から離れようとする熱をそれらが抱きとめているようだった。

暖かい。

寝具の中とはこんなにも、気持ちのよいものだっただろうか。服を着ているような着ていないような、妙な感覚に気がついて、その理由にも気がついた。服が大きすぎるのだ。手首と足首が外へ出ているのは、袖と裾を三分の一近く折り返してあるからだった。袖はともかく裾の方は、裾と呼ぶべき範囲を越えているかもしれないが。

目を閉じる。長く開けているのは幾分しんどい。疲労は抜けきっていないのだろう。眠たい。――眠っても、大丈夫。

はたと再び目を開けて、頭を左へ倒した。弟が静かに寝息を立てているのを、少年はそこに認めた。毛布が右手しかくろんでいないのは何も偶然ではなかった。

頬の血色が大分よかった。口許は兄と同じようにけばの下に隠れていた。呼吸は穏やかで一定していた。こうも穏やかな寝顔は久しぶりだ。ユアルは体ごとそちらを向いて、やや熱心に弟の横顔を眺めた。いつまでも見ていても飽きないだろう。

見蕩れるようにしているうちに、ソアルもまた、目を覚ました。ぼうとしていた時間は案外短く、呼吸を十もしないうちにはつとこちらを見た。安堵の色が広がった。兄は微笑みを返した。ほら。一緒だろう。今も。

弟は右手を毛布から出して、肩の横辺りへ持ってきた。天井を向

いた掌に、ユアルは自分の掌を重ねる。恐れを打ち消すためにでなく、ただ温もりに触れてみたかった。縋りつくようにしがみつくように、強く固く握りしめていたときの、強迫観念は今はない。気を抜けばその隙に消え去ってしまうのではないかという、切迫した不安はない。

この上なく幸福な気分で瞼を閉じる。気がつけば随分目が疲れていたけれど、このぐらいのことが何だろう。寒くも冷たくも痛くもないのだ。暖かくて柔らかくて、安らかで満ち足りて。綿入れの布団の確かな重量。毛布の内側に自分の体温の籠もる感覚。さっぱりとした敷布の上に緩やかに伸ばした手足。

明瞭な記憶はなかったが、ちらちらと思い出してきた。動くことなどもう考えられなかったのに、立つ破目になり、歩く破目になったこと。一度放棄する前の、二倍もきついようだったこと。雪は降らなくなっていた。弟でない声が時々聞こえた。先は長いよ、しっかり歩いて。頑張りなさい、半分来たから。ほら、あと一息。もうそこよ。耳に入っても頭には入らなかったし、聞くなら正直弟の声が悪かったものの、励まされる通りに歩き続けて、一刻かからずに乾いた場所に着いた。まだ暖かくはなかった。

生き返ったのはストーブに火を入れてからだ。爪先や指先や鼻先が、それまでと違う風に痛くなった。それから眠りこけたように思う。着替えたことも寝台に上ったことも覚えていない。そういえば弟の手はどこで放したのだろう。ストーブに手をかざしたときだったろうか。

喉が幾らか渴いていた。空腹も薄々感じていた。それさえ喜ばしかった。いずれ潤し、満たすであろうときのことを、無意識が想像してうきうきしているかのようだった。

「——つもりなの」

「そんなに信用置けないかなあ」

いつしかまた寝入っていたらしい。そんな気はちつともしなかったけれど、あるいは現実と同じように、寝台で毛布に包まれている

夢を見ていたのかもしれない。目覚めていなかったことに気がついたのは、聞こえている会話の始まりを思い出せなかったためであった。「警戒するのは悪いことじゃないけど、あんまり露骨だと上手くないわね」

どこかおもしろがるような声は、聞き慣れないが覚えがあった。ユアルは好印象を持ったが、ソアルはそうでもないらしい。神経を尖らせているのがわかる。

「お兄さんの意見も聞きたいけど。まだ寝てる？」

「なんで……兄弟だって」

「言つてたじゃないの、兄さんつて。大体、似てるわよ」

指摘された弟は黙り込み、体をひねってこちらに目を落としたようだった。恐らく相手を視界から外すのが不安なのと、二人用というわけではない寝台が狭いので、妙に用心深い動きになった。

自分が話題になっていることはわかっていたが、まだ目を閉じていたかった。開ければすぐに痛み出すに違いない。頭も少しずきずきするようだ。

「……兄さん？」

後でね、ソアル。まだしばらく寝かせて。

「兄さん！」

弟のただならぬ様子が腑に落ちなかった。兄さんと呼ばれば自分に違いないけれど、それとこれとが結びつかない。どうしてこうも必死に自分を呼ぶのだろう？

「……見せてみなさい」

「寄るなよ！」

「馬鹿言わない」

ぴしゃりと叱る声の後、額を冷たい掌が覆った。毛布の中の温かさに匹敵するほど気持ちがい。冷たい思いは昨夜散々、十分すぎるほど味わったのに。

熱ぐらい出しておかしくないか、と掌の主は呟いた。それから手を引いてしまったのは名残惜しかった。

「兄さん、兄さん！」

「喚かないの！ ほら、下りて。場所空ける」

反抗したそうな気配を隠さぬままながら、ソアルは指示に従った。
「早く着替えて医者呼んできて、場所教えるから。ファラデシカの家って言えば向こうはわかるわ」

着替えは隣室に置いてあったのだろう。幼い少年は思い切ったように飛んでいった。

それから先ほどの手が伸びて、広くなった寝台に、病人を仰向けに寝かせ直した。直された体勢が若干気に入らず、ユアルは自分で身を動かして満足の行くようにした。あら、と声がした。

「起きてたの？」

「……うん」

少しだけ目を開けてみた。それはやはり楽とは言いがたかった。

「しんどい？」

目を閉じ直し、首を左右にゆっくりと動かす。説得力はなさそうだったが、こうして寝ている分にはきついことはないのである。燃えるような体は正直なところ、気持ちよくさえ感じられた。毛布の内側に火照りの籠る感覚。

強がりや気遣いの類と取ったのか、あの手が額を撫でるようにまた触れた。冷たさが嬉しくて、ユアルは微笑んだ。

「ゆっくり寝てるっていいわ」

その言葉も嬉しかった。

「……ありがとう」

「うん？」

「兄さんを、助けてくれて。……疑ってごめんなさい」

「それだけのことがあったんでしょ。あんな夜にあんなところにいるぐらいなもの」

「……母さんが、帰ってこなくなったんだ。待ってたんだけど、家にあるお金がなくなってきた、家賃払わなきゃいけないときに払え

なくって……」

「追い出されたの？」

「母さんが町を出たらしいって、たまたま聞いて。追いかけてみよ
うってことになって。最初は歩いてただんだけど、通りかかった馬車
が拾ってくれて、……でも、そいつらが悪い奴らで……逃げて」

「それで、あたしも信用できなかったか」

「あいつらも最初は親切そうだったんだもの」

「じゃあ無理ないわ、警戒もするわよ。気にしないで」

「うん。……ファラデシカ」

「言いくいでしょ。ファーリヤでいいわ。親しい人じゃなくても
結構そう呼ぶから」

「ファーリヤ」

「ん」

「ありがとう」

「うん」

「……ありがとう……」

長い長い眠りから覚めたような気がしたが、一昼夜と少しだった
はずだ。ユアルは寝台の上にゆっくりと身を起こし、床の上で毛布
にくるまっているソアルをみつけた。こんな場所では寝ていて楽で
もないだろうに、兄の近くにしていると主張したのであることは想像
に難くなかった。

しばらくソアルを眺めてから、部屋をざっと見回す。寝台の他に
は筆筭と書き物机しかない。扉の向こうに少なくとももう一部屋が
あるはずで、記憶の中のストーブはそちらに置いてあるのだろう。
それでも十分、こちらの部屋も暖かい。目を離してしまえばその間
に取り返しのつかないことになりそうな、謂れのない不安は少なく
とも襲ってこない。

布団と毛布を静かにまくり、足を静かに下ろす。折り返した裾を
それでも少し引きずって、足音を忍ばせて扉へ近づき、弟を起こさ

ないようにそつと開けて滑り出た。そこで食卓に就いていた女性がパンを持ったままの手を止める。

「おはよ。弟君は？」

「寝かせてやろうと思って」

「そ。——ちよつと待って」

女性はパンを置くと、缶にミルクを注いでストーブに載せた。そうしながら軽く伸べた手が促したままに、ユアルは向かいの椅子に登った。

「えつと……ファーリヤ？」

「ん。よろしく、ユアル」

にっとう唇を裂くその笑みも、肘の辺りまで伸びる濃い金色の巻き毛も、雪の中で見上げた記憶が確かにあった。途轍もなく無遠慮に、非情に、酷に、正直思えた呼びかけに応えて、やつとの思いで頭を上げたときに。

「——ありがとう」

「どういたしまして。楽しいわよ、あたしも」

「楽しい？」

「家に誰かいるってことが。一人暮らしだとね」

あんたが寝込んでることがじゃないわよ、と悪戯っぽく付け加える。

「何か食べる？」

「ソアルが起きてから」

「了解」

ファラデシカはどこか楽しそうに、自分のパンを大きく齧り取った。それを飲み下してから、ふと真剣な顔になる。

「ソアルからざつと聞いたけど。お母さんを捜してるって？」

「……うん」

寝台の横で話しているのを、夢か現か聞いた気がする。重なるかもしれないけれど自分からも簡単に話して、弟が言っていなかったように思うことは補足した。兄弟が父を知らないことや、母の外泊

が珍しくなかったことや、男と一緒に町を出ていったらいいから、待っていたって帰ってこないよと教えたのが、二人を追い出した大家だったことなどを。

不確かな目撃情報に頼り、捜すべく町を出たものの、本当は捜しても無駄なのではないかと思う。母は自分たちを捨てたのだ。上手くみつけれないので、また一緒に暮らしてくれるとは期待できない。

ユアルは大家の言ったことを、出鱈目とも中傷とも感じていなかった。ありうると判断し、だからかと納得し、けれどもソアルにそうは言えなくて、追いかけて確かめようと代わりに言ったのだ。信じたくない気持ちもどこかにあった。事情があつたのだと、悪かつたと、赦してと、泣いて抱き締めてくれるかもしれないと考えたかった。

フアーリヤは途中で缶を下ろして、温まったミルクをコップに移してユアルの前に置いた。何か飲みたいと自分から要求するのが躊躇われただけで、喉はからからだったからありがたく頂戴した。熱すぎない、見事なまでの適温が流れ落ち、クリームが渴きと痛みを癒していく。今の話題を忘れそうなほど、ほっとした気持ちになつて少年は微笑した。

「言っちゃんですけど、無茶だと思うわよ。あんたたち二人で」
弟も当然知ることだけれど、思い出して楽しいことでもない。起きてこないうちにと急いで一通り話し終えたと、正直な感想をフアーリヤは述べた。少年は素直に頷いた。何せ親切を装った悪人に騙されて、そこから逃げ出した次には凍死しかけたばかりである。

いや、微塵も疑わなかったというわけではない。馬車から声をかけられたとき、一見親切そうだったけれども、本当はどことなく近寄りがたかった。こいつらは危険だと第六感が告げていたのかもしれない。ソアルが疲れきっていたのと自分自身も疲れていたのと、理由もなく疑うのはよくないと考えたのとで、なのにかうかと誘いに乗ってしまった。感づいていたのに避けられなかった前歴があ

るのだから、自分たちを過信するわけには結局いかない。

第一、二人きりで飛び出したりせずに、教会にでも保護を求めて大人しく町で待つという選択肢も、今思えばあったのだ。そうしていればソアルをあんな目に遭わせずに済んだものを。

意識の上では漠然と、もっと上手くやれたんじゃないかなと感じているにすぎなかったが、少年の抱いた危惧と後悔はそういうことだった。余計なことを始めたために弟を危険に遭わせて、自分は守ってもやれなかったと。

指を一本、ぴんとファースリヤは立てた。真剣な表情が少し崩れた。「ですから、ファースリヤさんが手伝ってあげましょう」

「え？」

「自分でやるんじゃないけど。人脈ってやつ。人捜しが得意な知り合いがいるから頼んであげる」

自分の思いつきを気に入っている風で、立てた指を得意げに振る。

「みつかるまでは、うちにいればいいし」

「……みつからなかったら？」

「みつからなかったかどうかは一生わからないもんだよ」

みつからない限りは一生でも置いてやるということに、鵜呑みにすればなりそうなことを娘は言った。みつかるわよと力づけるでも、そのときはそのときと先送りにするでもなかったことに、少年は二度瞬きをした。

「……後で、やっぱり嫌だって言わない？」

いざ本当に母がみつかったらと、よぎった不安には目をつぶって尋ねた。いいの？ とは訊かなかった。なんで？ と。

「言わない。破ったら、クイに憑かれてもいいわ」

「怖いこと言わないでよ」

さらりと口にした大仰な誓いに驚く。クイとは魔物の一種であつて、悪いことをするとクイがやってくるよ、一滴残らず血を吸われるよ、と悪戯な子供はしばしば脅された。駄用の魔物かというところでもなくて、クイに取り殺されてしまえ、という悪態は大人の間

でも性質の悪い、悪意の強いものだったはずだ。

「神様でいいじゃない」

「神様の前で愛を誓って、離婚した夫婦なんてざらにいるのよ」

「……怖いこと言わないでってば」

神よりも魔物に誓った方が信用できると言っているようではないか。

「ああ、そうだ、代わりにっというんじゃないけど」

過激でも何でもないかのように言いっ放しにして、金髪の女性は指を弾いた。

「あんたたちを最初に拾った人たちのこと、詳しく教えてくれる。悪い奴らなら放っておけないでしょ」

「それは、いいけど」

言い終わるか終わらないかというときに、がたと寝室の扉が開いた。振り向けばソアルが血相を変えて立っでいて、兄をみつけて泣きそうな顔をした。

「驚くじゃないか！　いないからっ」

「ごめん。よく寝てたから」

空の寝台に余程ぎよつとしたのだろう。ファアリヤの前であることに構わず、歩み寄るなり兄の胸に顔をうずめた。

ユアルもファアリヤを気にせずに、弟の背に両手を回した。胸に温かみが、腕に震えが如実に伝わる。全然違うや、と思った。体温も身じろぎも微かだった、もう随分前になるようなあの雪の夜とも母は帰ってくるまいという、大家の言葉を聞いた後とも。母の帰りが遅すぎると、薄々感づき始めた頃とも。

「大丈夫だっで。どこに行っだと思っだんだよ」

「どこに、行っだのかと、思っだんだよ！」

「変なとこ連れてきやしないわよ」

頬杖についてファアリヤが笑った。ソアルはたった今その存在に気がついたように、兄の腕の中から抜け出して、頬を拭っでから顔を向けた。

「とりあえず着替えてきたらどう、二人とも。椅子の上に置いといたでしょ」

「……うん。兄さん」

腕をつかんで引くので、ユアルは椅子から下りた。向こうもあ言ったのだから、話の続きは後でよい。一番思い出させたくない部分は済んだ。

指に込めた力の強さに、心配させたんだと今さらながら痛感する。目を覚ますまでそばにいてやればよかった。

「あ、ちよつと。ジャムと蜂蜜とどっちがが好き？」

開け放した扉に手をかけたところでフアーリヤが呼び止めた。ユアルは弟を見た。ソアルは少し考えた。

「楓蜜」

「……どっちかでお願い」

「じゃあ蜂蜜」

相手が一瞬詰まったことに子供はにやにやし、元気ではあると安心してよいのか、たしなめるべきか兄は少々迷った。フアーリヤはわざとらしく呆れた顔をして、追い払うように手を振ってみせた。

魔魅の子孫 1 (後書き)

用語解説

「楓蜜」という書き方は造語ですが、メープルシロップを指しているつもりです（正式な訳語がみつからなかった）。舞台が異世界だとカタカナ英語をどこまで使うかは悩みどころです。

魔魅の子孫 2

「——何て言ったの。サグニ」

「ファラデシカ殿から、近くお会いできないかとのご伝言が」

「やっぱりそう言ったのね！」

シエカは両手で頬を挟んだ。わけもなく窓辺へ駆け寄ろうとして、着くまで待てずに途中でくるりと回転する。スカートがふわりと浮き上がった。

「お姉様の方からなんて！」

「例のないことです」

舞い上がる主人に対してサグニは冷ややかだった。

「それだけ重大なご用かと。お心に留めておかれた方が」

「わかつてるわよ」

水を差されて少女は露骨に嫌な顔をした。

「結婚を決めたって言われても拗ねないわ」

「……左様ですか」

「その間は何かしら」

一睨みして、椅子にすんと腰を下ろす。滅多にないどころか初めてのことだが、何の用事だろうと考える前に、無心に喜んでも構わないではないか。

「それで。いつと約束してきたの」

「十二日後の——」

「そんなに先!？」

「ファラデシカ殿のご都合のよい日が限られますので」

「それはいつといつ」

追及すればサグニは渋らずに答えたが、その日のシエカ自身の予定も一々言い添えた。中止か延期にできるものはないかと挑むような顔つきで聞いていた令嬢は、十二日後まで待つしかないと結局認めざるをえなかった。子供っぽく唇を尖らせて、しかし当然だと考

え直す。変更しうる予定があれば、命じるまでもなく腹心はそう計らっただろう。指折り数えてその日を待つしか、できることはもうないわけで——勿論、シエカはそうすることにした。

男爵家の一人娘とされるシエクネシカ「アマルス」には、実際には異腹の姉がいる。男爵家の系譜にその名がないのは、町の女に父が産ませた庶子であるためだ。名家の出である母との婚約話が持ち上がったときに、金をやって町から出ていかせたという。妾の扱いも受けなかった女は隣り町のさらに隣り町へ移り住み、男爵とは二度と面会しないまま没したとのことだった。

いささか反抗的で潔癖な令嬢は、父は身勝手に考えなしだったし、女は浅はかか打算的だったろうと、心の底から軽蔑を覚えた。けれどもまだ見ぬ異母姉のことは反動のように慕わしく感じ、父の外聞が悪かろうが女が我が子を手放すことになるのが、本当は男爵家で育てられるべきであつたと考えた。アラデシカと貴族らしい名を与えたからには、最初は父にもそのつもりはあつたのかもしれない。同じ血を同じだけ引く人間がこの世にいるのであれば——近しくありたい、ありたかつたと思つた。

けれどもその頃には真実の長女は既に成人して働いていて、今さら引き取るでもなかつた。それに一度目に会つたとき、馴染みある町をわざわざ離れることも貴族界へ後から足を踏み入れることも、望まないと本人が明言している。ならばせめてと生活費の援助を申し出れば、自分の食いつ持ぐらい自分で稼いでいると、思いなしに厳しくぴしゃりと断られた。男爵令嬢であつたはずの者が働いて稼いでいるということ自体、シエカには納得しがたかつたがどうしようもない。妹と会うことは楽しんでるらしく、食事に誘えば応じてくれるけれど、姉が姉と大っぴらに名乗る日はどうにも来そうになかつた。

姉の方からも自分に連絡をつけられるように、サグニに命じて用意させた通信網を、姉が利用したのも今回が初めてだ。それだけ重

大な用事であろうという指摘自体に異論はない。それがどんな報告でも相談でも依頼でも、十二分に応えてやろうと意気込んだシエカを乗せて、男爵家の家紋の入らない馬車はいつもの店に着いた。この町で三番目になるという高級料理店である。一番目と二番目は敷居が高すぎて、姉には入りづららしい。ここだって十分雲の上だけれど、と笑った姉はけれども実に落ち着いて見えて、町一番の高級店にも気後れするようには思えなかった。

導かれた個室に姉一人が待っているのを確認し、二刻後にお迎えに参りますと告げてサグニは引き返した。迎えの時刻に容赦なく連れ帰る以外、姉妹の語らいの邪魔はしないのである。

「待った？ お姉様」

「待ったのはあなたじゃないの？ よく十二日も待てたわね」

姉妹らしい姉妹のように、フアラデシカ「エノフは軽口を返した。母親譲りという金色の巻き毛は妹よりもずっと濃い。飾りの少ない藤色のドレスは品がよく、似合う。姉のセンスであるかもしれない。あるいは仕立屋の腕であるかもしれないが、いずれにせよシエカは何か鼻の高い気分になる。やはり血は――生まれは争えない。

胸元に光る白梅をあしらったブローチが、自分が贈った物であることも嬉しかった。梅はアマルスの紋である。勿論家紋は家紋らしく図案化したものであって、ブローチの写実的な梅花とは大分趣が異なるのだが。生活費という話になると受けない姉も、贈り物を突き返しはしなかった。

「それにしても驚いたわ。お姉様から会いたいと言ってくれるなんて」

サラダとスープを経てメイン料理が出てきたところで、即ち給仕が当分現れない段階までコースが進んだところで、シエカは水を向けた。姉の方から会合を望まれた妹の、浮かれ気分はそこまでだった。

「拾っ……た？」

「二人ね。兄弟」

フアーリヤは指を二本立てた。

「ど……どうして」

「だって、ねえ。普段通らない道なのよ。普段行かないところに行った帰りで、そこからの帰りにも普段は使わない道なのよ。何となくいつもと違う方に行ってみたら、他の誰にもみつからないでそこにいたのよ。それはあたしが拾うしかないでしょ」

「そう？」

「その場の流れとか空気とか、大事にするのよあたし」

少年の片方が聞けば考え込んだろう発言であることは、無論シエ力にはわからない。どんな用事でも応えようと思った、その『どんな用事でも』という部分が甘かったことはよくわかった。人は、時に――予想もつかないことを、言うのだ。

姉が。子供を。拾ったと？

「運命の導きには従うのよ、って言った方がいいかしら。職業柄ね」
フアーリヤはようやく手を動かして、青豌豆を添えた鶏挽き肉の揚げ料理の、端の方を一口大に切った。溶けたバターが流れ出る。

「……教会に連れていくものじゃないの、普通は？ 何歳？」

「上で十歳ぐらいかな」

「十歳なら、預かってくれる年でしょ」

孤児でも捨て子でも、居場所のない子供の行き先といえば、まずは教会を思い浮かべるものではないのだろうか。

実際、思い浮かべてはいたらしい。やっぱりそうよねえ、と姉は眉を寄せた。

「でもね、あたしここの牧師好きじゃないのよ。母さんが死んだときに色々言われたの」

「……ああ」

その点に関してはその牧師と意見が合いそうだと、異母妹は曖昧に相槌を打つ。潔癖な少女が嫌った父たちの行いは、聖職者にも好まれるまい。尤も聖職者であれば、死者に対しては寛容であるべきだろうけれど。

「だからって、お姉様が引き取らなくなつて。一時的っていったて」

「――反対する？」

不意に、声が低くなつた。シエカは急速に喉が渴くのを感じた。気を悪くしたのではない。ただ、反対だと答えれば、フアーリヤは二度とこの話を聞かせないだろう。といつて方針を変更して、兄弟を教会に任せることもあるまい。この件に関して協力を仰がなくなるだけのことだ。協力を仰ぎたいことが、今現在あると将来起ころうと。

「……ううん……驚いただけ。あんまり、意外で」

フアーリヤの妹は、ようよう、言つた。

「だって……子供好きっていうわけでもないでしょう、お姉様」

「そうね、子供がつてわけじゃないわ。弱いのは、兄弟ね」

「兄弟？」

「あなたのせいよ、妹ちゃん。昔はそんなことなかったのにっ、と唇を裂く。何とも返しようがなかった。

ずっとその存在を忘れていた気のする肉料理に、逃げるように手をつける。中のバターがそろそろ冷めて固まっているのではないかと思ひ、そうなつていなかったことに何か理不尽な気分になつた。

驚いただけという言葉で、本当に誤魔化したのかどうかはよくわからない。少なくとも追及はされなかった。喜んで鵜呑みにしたのかもしれないし、不自然を感じながらも気づかないことにしたのかもしれない。反対されない方が、勿論嬉しいのだろうから。

「――お姉様」

シエカは顔を上げた。

「その子たちの母親の、名前と特徴はわかるかしら？ それからその人の持ち物か、その人の作つた物があればなおいわ」

協力するわと言われれば、より嬉しいだろう。こちらから言い出せば、さらに一層。

努めて得意げに、指を一本立ててみせる。恩着せがましく聞こえ

るぐらいで寧ろ丁度よい。積極的に――映りますように。

「男爵家の力を見せて差し上げましてよ」

意外そうとも満足そうとも言える笑みを、ファアーリヤは浮かべた。

「……サグニ」

「はい」

「昨夜、お姉様に頼まれたのだけど」

「昨夜と仰いましたか？」

長く仕える使用人は眉を上げた。

「そうよ。他の、いつがあるの」

口ではそう返しながら、それなら昨夜のうちに話せばよいものだと自分で思う。他ならぬ姉の頼み事を、一晚寝かせるなど自分らしくない。

人捜しを、と言いかけてやめた。拾ったという兄弟の話が先だ。

サグニの怪訝な表情は、やがて幾分呆れたようなそれになったが、シエカは碌に見ていなかった。

「人捜しというのは、行方が知れないというその二人の母上を？」

「ええ。手懸りは預かってきたわ」

尋ね人の名前と特徴と、失踪直前に息子たちに渡したという指輪とを、ファアーリヤは用意よく持参していた。依頼するつもりはやはり最初からあったのだろう。妹の方から言い出すとは、やはり思っていないなかったにしても。

所有物や制作物が役に立つのは、魔術でその持ち主や作り手を追えるからだ。術師なら誰でもこなせるような簡単な術ではないらしく、そのためか一般にはあまり知られていない。魔術に直接縁のないシエカやファアーリヤが知っているのは、以前も一度似たような件で力を貸し、借りたためだ。正確には姉自身が困っていたのではなく、その友人の幼い妹が突然姿を消したのであって、身も蓋もないことを言えば、シエカはサグニに丸投げしたにすぎなかったが。

姉にはああ言っただけで、何も男爵家が総力を結集して搜索に当

たるわけではない。シエカが自由に動かせるのはサグニぐらいしかない。ただそのサグニが滅多なことでは無理だと言わず、自分一人では不可能と思えば助け手を探して、主人の希望を見事叶えてみせるのだ。涼しい顔をして実はなかなかの負けず嫌いなのである。

筆記体を書けない姉の手になる固い大文字の覚え書きと、首にかけていたのだらう紐を通した指輪を、受け取って青年は矯めつ眇めつした。あなたが使うわけじゃないでしょうと呟いたのを聞き流して、意匠が気になりますねと指輪を示す。

「松葉です。安物ですが、高級品を真似たようですね。模造と呼ぶには拙いが」

「ああ……だから取られなかったのね」

「取られる、と？」

「みつけたら、子供たちを引き取るように説得して。みつけただけでは半分よ」

今度はこちらが聞き流してやる。

形見よろしくそんな物を残して消えたとなれば、子供たちの許へ戻る予定はどうも当分なさそうだ。みつければ引き渡せるというわけでもないようだ、子供自身が考えたことをシエカも考えた。

それでは意味がない。姉のところにその二人が残ったままでは。

「それと……子供二人を養うのに十分な、支援を。その二人がお姉様のところにいる間」

そこまでの余裕は流石にないだろう。その子供たちに不自由をさせないためだと主張して、シエカはそれを承知させたのだった。尤もファーリヤは思いの外あっさりと、申し訳ないけどお願いするわと言った。シエカは心中複雑だった。自分自身のためには頑として受けなかったのに。その子たちが、そんなに、気に入ったの？

「拗ねないのではありませんでしたか」

「たしなめるようにサグニが言った。思いなしか、温かく。」

「拗ねてなんて……いないわ」

「左様ですか」

「それより、もう一つあるのよ」

ファーストからの依頼、というよりも注進。少年たちを最初に拾ったという者たちのことがある。

「言っておくけど、母親を捜すのが先よ。それを疎かにはしないでちょうだい」

釘をさした。それが最優先だ。注進をサグニは気にかけそうだったが、シェカは正直大して関心を持たなかった。

それよりも子供たちのことだ。少しでも早く母親がみつかつて、母親が子供たちを引き取る気になって、子供たちが姉の周りからいなくなってしまうばよい。自分には届かないような、姉のすぐ近くから。

拗ねていないとすれば、妬いていたに違いなかった。

次に会うときに、打ち明けてしまおうか。

家出の計画でも練るような心持ちでシェカは考えていた。

教えてしまおうか。自分たちが、何者なのか。

サグニが聞けば寧ろ、黙っていたのかと呆れるかもしれない。恐れることでも恥じることもない、周りに知らればまずいにしても、本人に隠すようなことではないと。……自分が安全圏にいるから、そんなことを言えるのだ。

告げてしまおうか。自分たちが——アマルスが——クイの子孫であると、いうこと。魔物の血を引く者だということ。その血の目覚める可能性が、あること。

それは当然ながら最大級の秘密で、アマルスの血を引く本人と、ごく僅かな側仕えしか知らされない。嫁いできた母は聞かされていないはずだし、嫁いでいった叔母に子供がいれば逆に聞かされていただろう。

クイ。代表的な、有名な魔物。その姿は人間と変わらず、人間に紛れて人間のように生活していると言われる。食人鬼や吸血鬼と混同されたり、魂を抜き取るとして死に神と同一視されたり、誘惑し

て精気を吸い取る色魔扱いをされたり、その伝承は様々だ。クイの中にも格の違いがあつて、ちゃんなものから恐るべきものまでいるのだと、まことしやかに語られることもある。

あらゆる化け物を無節操に継ぎ足されているわけでは、しかし、ない。クイの定義とも言うべき法則はあつた。

一言で言えば——クイとは、『奪う』魔物である。

尤もこれは世間で言うクイの話で、実際とは異なる部分も多かった。食人を行ったクイがいなかったとは限らないけれど、クイとしての習性ではない。殺人を行った者がいた可能性はあるけれど、犠牲者の魂をあの手へ運ぶような役割は担っていない。誘惑は、その気になれば容易かもしれない。目を奪い心を奪う美男美女がよく生まれるというから。

市井で育った姉はしかし、クイの正しい知識など持たない。奪う魔物としてのクイしか知らないはずである。根本的な誤解から正す自信がなくて、シェカはアマルスの血の意味を姉に伝えていないのだった。それに——正しい知識も、気持ちのよいものではない。わざわざ教えることはないと思つた。

けれど。

「わたしたちは魔物なのよ。お姉様」

長椅子にもたれて、令嬢は独りごちた。

「いつ目覚めるかわからないのよ、曾お祖父様のように。その子たちが可愛いなら、離れた方が安全なのではなくて」

空々しく響いて溜め息が出た。これはこれで、正論であるはずなのに。

シェカやフリーヤはクイの子孫だ。今はまだ。曾祖父は——クイそのものだった。クイそのものになった。覚醒して。

四代続けて目覚めなければ、魔が失せたということだと言われている。サグニの家がよい例だ。何百年も前にアマルス家から分かれ、二人ほど覚醒者を出した後は片鱗すら見せていない。サグニート＝エニユオはクイを先祖に持つだけのただの人間である。

曾祖父から数えて四代目のシエカは、魔の継承が絶えるか続くかの境目にいる。自分が化けなければ自分の子孫は安泰であるわけ、つまり化ける可能性は却って高かった。ここを逃せば絶えてしまうクイの血が、自己保存本能を発揮するらしい。だからこそ今まで続いてきたのだ。エニユオ家のような分家では途切れることが多いけれど、アマルス家では必ず四代以内に誰かが目覚めてきた。

魔物の本能の開花する日が来ることを、シエクネシカ「アマルスは恐れていた。クイそのものとなった曾祖父の行いを知ったときから、民間の伝承と関わりなく、シエカにとっておのれの家系は忌むべきものとなった。実のところ嫌悪の対象は、クイというよりも曾祖父の血であると言えたが、その区別を少女はつけなかった。

異母姉の存在は、それゆえ支えだった。覚醒の危険を同じだけ孕むという連帯感。ならば早いところ事実を教えて、心構えをさせるべきだとサグニは叱るだろうが。

そう、ファラデシカ「エノフも目覚めうる魔を秘めるのだ。魔の本性を現して、手始めに手近な者を襲うと決まっているわけではないけれど、近しい者ほど襲われたときに危うい。守りたければ、離れるべきだ。

「……何を考えているのかしら」

自嘲気味に呟いて首を振った。自分たちへの恐れは本物だけれど、今さら姉に告げようなどと思いついたのは、姉に嫌われずに姉の許から追ひ払いたいからだ。五歳以上も年下の子供たちを。情けないと言おうか、みつともないと言おうか。

自分で自分に呆れながらそんなことを考えていた何日かは、後から思えば随分と呑気な時間だった。

「何て……言っただの」

「ウィアラ・イルムが子供たちを置いて逃げたのは、子供たちの父親がクイの血を引くと知ったためでした」

「どうして今さらそんなことがわかるの！」

食ってかかった令嬢の前に、腹心は落ち着いて掌を広げた。安物の指輪が鈍く光った。

「ウィアラ・イルムとその者は夫婦ではなかった。その者は去る前にこの指輪を与えたのです。子が生まれたとき、証となるように」指輪の元の持ち主を、サグニから依頼を受けた術師は見事捜し出した。一方でサグニはその意匠について自ら調べてもいたらしい。松葉の紋章を厳かに示す。

「異国のある名家の紋です。クイに連なる、アマルスとは異なる流れの」

父親になる覚悟がなくともクイの子孫の自覚があれば、我が子には目印をつけておくものだと言った。親子の認知のためではなく、魔を秘める存在の識別のために。クイを詳しく、正しく知る者に、その子孫と見分けられるように。

その男がその家の人間であつたとは限らない。ゆえあつて家と故郷を離れ、国境を越えて移ってくる者や、旅行者として訪れて軽はずみに子を残す者もいるだろうし、その子孫であつたかもしれない。その家に属していなくてもその血から魔が消えていなければ、その家紋を目印にするのはおかしいことではなかった。サグニに覚醒の可能性があり、自分の子供と別れる破目になつたとしたら、やはり梅の紋を入れた品を与えただろう。梅は厳密にはアマルス家というよりもアマルスの血を示す。

子供の父親から受け取った指輪を、尤もウィアラは生活費の足しに売り払っていた。意匠を真似た指輪を代わりに作らせたのは、もしもその男と再会することがあつた場合に、なくては都合が悪いだろうと考えたためらしい。替え玉の代金を差し引いても十分な金額が残つたのなら、品物の質にも当然それだけ差があるわけで、本物を知っていれば偽物であることは一目瞭然だろうが。よく見なければ気づくまいと高を括つたのだろうか。

異国の家の紋章など女は当然知らなかったし、ましてその家がクイの子孫に当たるなど思いも寄らないことだつた。けれども最近に

なつて、目を留めて息を呑んだ者がいたという。あんだ、それをどこで。それは魔物の印だぞ。

最初は本気にしなかったけれど、段々と怖くなってきた。言われれば思い当たる節があるような気がしてきた。そうしてついには指輪の写し共々、その男の子供を置いて逃げ去るに至ったのである。

「そんなこと——そんな」

自分が何を言おうとしているのか、何を言いたいのがよくわからないままシエカは口を利いた。

「家紋まで知るぐらいなら関係者でしょう。それなのに、そんな——言い方を？」

「被害に遭った側の関係者やもしれませんよ。悪事を働くクイもいれば愚かなクイもいるでしょうし、兼ね備えた者もあります。人を襲った上で、自分はクイであると明かしてしまうような」

困り者どころではありませんが、とサグニは付け加えた。目印だけを知る者がいたことに、戦慄する余裕はしかしシエカにはなかった。

それでは——その子供たちも、同じなのだ。その父親が自身の血脈を正しく理解していたとすればだが。実は五代以上顕現が見られておらず、危険が失せていることに気づいていないというような事情がないとすれば。

姉と自分との秘密の絆に割って入られたような、湧き上がった不快感が筋違いであるという自覚はあった。嫉妬もあつただろうか。父から魔の血を受け継ぎながらその意味を知らされずに育つ、子供たちの境遇が姉と重なることへの。

けれども、何より——何だろう——そんな下らないことよりも。

「……それで、わからせたのでしょうか？ クイの伝承に、誤解が多いこと」

みつけるだけでは半分だと、自分で言ったのを思い出す。根も葉もない話ばかりではないが、何も目的は教育ではない。我が子から

逃げる必要はないのだと、ウィアラが思えばそれでよいのだ。目覚める可能性はなきに等しいと、言い切ってしまったてもこの際構わない。方便というものだ。

返事がなかった。

「サグニ」

「そればかりは」

「どうして！」

つかみかからんばかりに令嬢は叫んだ。

「恐れることではないと、わたしには散々言うじゃないの！ 曾お祖父様のことは曾お祖父様の問題で、クイの血の問題ではないと。同じことを言えばよいだけでしょー！」

「それでもお嬢様は恐れておいででしょう」

青年は静かに指摘した。

「根づいた恐怖を拭うのは難しい。こればかりは、わたしには」

「……嘘よ」

力が抜けたように座り込んだのは、サグニの力が及ばないことを、自分が証明する形になったためではなかった。

「おまえが、できないと言うなんて」

信じられなかった。自分でなくとも誰かにできることならば、その誰かに実現させる腹心が、匙を投げるなど。その誰かをみつけることもできないと認めるなど。何かとても絶望的な事態であるような気がした。

……では、ウィアラは息子たちを引き取らないのか。少年たちはファーリヤの許に留まることになるのか。クイの子孫が三人、同じ屋根の下で暮らすことになるのか。

ぞっとした。子供じみた嫉妬ではない感情の正体を悟った。

クイは引き合うのだ。その血の拡散を防ぐために。

クイは呼び合う。

凍える少年たちがいた道へ、姉が足を向けたことも。子供好きでもない姉が、当たり前のように連れ帰ったことも。ひよっとしたら

ウィアラが失踪して、その子らがこの町へ来る契機を作ったことさえ。

クイの血のなせる業だとしたら。

目覚めかかっているか、目覚める準備があるということなのではなからうか。三人のうちの誰か、ではなく、三人ともが。誰か一人であれば、三人集まった意味がない。

それなら説明がつくというものだ。少年たちが無謀な旅に出たことも。ファーリヤがファーリヤらしくなく、子供を拾ったり異母妹に頼ったりしたこと。

——お姉様。

死病の兆候を見て取った心境に似ていた。姉はいずれ、化けるのか。曾祖父のように目覚めるのか。人間の姿を保ったまま、その中は魔物と化すのか。

クイの血を少年たちも引いているならば、その安全のために離れた方がよいという口実は使えない。クイの力は基本的に、クイには利かないものなのだ。そんなことは、けれどもどうでもよい。

「ファラデシ力殿には、わたしからお伝えしますか」

サグニが言い、シエカは見上げた。指輪を固く握りしめた拳を見れば伝わるだろう、押し殺した悔しさは顔には表れていなかった。

「あるいはファラデシ力殿が、ウィアラ・イルムを説得できるやもしれません」

「……そうね。頼むわ」

無駄だろうと、どこかで思う。少年たちを何が何でも母親に返してしまおうとは、姉は考えないだろうから。それともウィアラと同じように、少年たちを恐れるだろうか？ 子は母と共にいるべきだと尤もらしいことを言って、魔物の子孫を遠ざけようとするだろうか？

もしもファーリヤの説得によってウィアラが考えを改めたとしたら、先の仮説は誤りだったことになる。覚醒を控えたクイの血が呼び合ったのではなく、心臓に悪い偶然にすぎなかったことになる。

どうか、そうであってほしい。ファーリヤの妹は真剣に祈った。

魔魅の子孫 3

フリーリヤの母親が使っていたという寝室から普段より早めに起きて出ていくと、フリーリヤが食卓に並べたカードを真剣な顔をして睨んでいた。初めて目にした光景だったが別に意外でもない、一日の運勢でも見ているのだろう。フリーリヤは占い師であった。集中を乱さないよう静かに、ユアルはパンの塊を出してきてナイフを入れた。どこにしまっているのかも、食べてよいことももうわかっている。

もう一月になるのだろうか。新しい環境に馴染むのは思いの外に早かった。ずっとこうして暮らしてきたように、フリーリヤといることが当たり前になった。道を覚え、店を覚え、人を覚え、その家を覚えて、町のことも段々とわかってきた。フリーリヤの友人やその妹を始めとして、顔見知りが増えてきた。ここへ来る前の毎日がどのようなものだったか、最近は少し考えなければ思い出せないほどだ。

「――ユアル」

「うん」

「今日ね。ひよつとしたら午前中で切り上げて、お昼過ぎからリーゼの食堂にいるかもしれないわ。何かあったら、そっちに来て」

リーゼはフリーリヤの友人で、その店というのは正確にはその親の店だ。占いだけで食べていかれるようになるまでは、フリーリヤも毎日ではないが働いていたという食堂。

何か、なんて、そうそうないだろうけど。わかっているというのは、安心する。会わなければならなくなったら、会いたくなったら、どこに行けばいいか。

「わかった」

二人分の皿を手近づいて答えれば、占い師は見返ってにこりとし、片づけるわね、と商売道具をまとめ始めた。空いた卓上に皿を

置くと、蜂蜜を取りに戻らずに、手を背中後ろに組んでユアルは覗き込んだ。暗い紫色の裏と、草木や鳥獣を描いた表。同じく占い師だった母親から受け継いだもので、母親はその師匠から伝えられたという。確かに裏の模様は古風だし、表は幾分色褪せている。梅花、桜花、松葉、松毬、枝垂れ柳、薄野。

「そうしなさいって、占いに出たの？」

「出たのは『知らせが届く』ってこと。カードのお告げは大雑把なのよ。届きそうな知らせっていったら幾つか心当たりはあるから、内容次第ではリーゼの店で人と会うことになりそうねっていうのは自分で考えるの。全然違って思いがけない知らせがあるのかもしれないけど。占いてそういうものよ、半分は推測と自己判断」

「とんとんと音を立てて、札が手の中に整う。心当たりがあるという知らせが、何のことかは見当がついた。

「……ね。……ローゼのときは、どこまでが占いでどこから自分だったの」

——お母さんのこと？

問おうとした本当の言葉は口から出なかった。まだいいよね、と内心で呟く。そうだとすれば、どのみちやがてわかるはずだ。急かしたって、だって、フリーリヤだってまだ知ってるわけじゃないし。

「あら。聞いたの」

「うん、リーゼが言ってた。フリーリヤがローゼを助けてくれたのって」

今はユアルたちの友人ともなった、年齢の離れたリーゼの妹は、何年か前に人買いにさらわれたことがあるという。占い師フラデシカがその居場所を突き止め、家族の許へ連れ戻したのだと、よそから来た兄弟に語った者はリーゼ以外にもいた。

ちなみにそのとき周りの者たちは、クイに捕まったのではないかと恐れていたらしい。というのはかつて、リーゼたちの親が子供だった頃に、そういう事件が連続して起こったのだ。子供が行方不明になり、数日後に老人の姿で発見されるという事件が。奪う魔物た

るクイの他に、若さを吸い取るなどということのできる者がいようか？

それ以来アマルス領の人々は、失踪、特に子供の失踪となると、事故や誘拐よりもクイを思い浮かべるらしい。血を吸うという話しか知らないよそ者の少年には、正直ピンと来なかった。怖いのは魔物ばかりではない。胡散臭く見られることも少なくない占いが、魔物云々より余程現実的だった真相を暴いたことに、ユアルは皮肉なものを感じ——腑に落ちない点の一つ、同時にみつけていた。

尋ねてみようかと再び迷う間に、娘は一本指を金髪の中に突き刺して、困った顔をして頭を掻いた。

「あのね、夢を壊すみたいだけど。秘密なんだけど、あれはあたしじゃないの」

「え……そうなの？」

「みつけてくれた人が目立ちたくないって言うから、あたしだってことにしたのよ」

ファーストはそのようにぼかして告げたが、要するにローゼの救出の裏には、ファーストの要請とシェカの命令とサグニの暗躍があったのである。シェカが関わっていることをサグニが公にするまいとしたので、ファーストはサグニからの情報を、周りには占いの結果として伝えたのだった。

黒いケースにカードを収めて、こうなっちゃうとちよつとずるいけど、と占い師は肩を竦めた。手柄を横取りした形で評判を上げたことになるのだ。

「札占いでわかったのは、ここより西でここより南にいたってことだね。考えてみなさいな、どの町のどの家にいるかまで占えるんだったら、人買いの方もみつけてるわよ」

納得の行ったユアルは、そういえばそうだね、と安堵を含んだ微笑みを浮かべた。ローゼは自分で捜し出したのに、何故母のことは人に委ねたのだろうと不思議に感じていたのだ。母のことを訊くのをやめた代わりにローゼのことが浮かんだのも、連想が働いたため

かもしれない。リーゼの妹のためには駆使した技術を、自分たちの母のためには出し惜しみしたというわけでは、けれどもなかった。

ローゼは家族の許へ戻され、買手は罰を受けたけれども、売り手は逃げおおせたと聞く。ローゼの搜索と同じ魔術で追うことができなかったのは、手懸りとなる品物がなかったためだ。フアーリヤの占いにはそうした手懸りはいらないのだから、居場所を特定できるのならば遠慮なく特定していただろう。

元凶を逃がしたことはサグニも悔しがっていたと、名前は出さなかったがフアーリヤは言った。それから真面目な顔をして、傍らに立つ少年をみつめた。

「ちゃんと捕まえとけば、あんたたちも怖い目に遭わないで済んだのにね」

町を出てまもなく兄弟を拾い上げた者たちこそ、ローゼをさらって売り飛ばしたその者たちに違いないとフアーリヤは判定していた。これも占いに出たのではなくて、見た目の特徴や互いの呼び名、あるいは馬車の様子などが一致するためらしかった。

同じ一味であるにせよないにせよ、人買いだろうという推測には何の異論もない。行き先が約束と違つと気づいてどういふことかと尋ね、つべこべ言つと別々に売つ払うぞと脅されたときから、そんなことはわかつていた。だからこそ逃げ出してきたのである。失敗して再び捕まれば、本当に引き離されてしまふかもしれないという恐怖を乗り越えて。

とはいえこれだけ時間が経てば、もう追つてはこないだろう。適当な子供がたまたま通りかかっただけで、ユアルとソアルを特に狙つたわけではないのだろうから。

「でも、そしたらフアーリヤには会えなかったよ」

「出会う運命ならどう転んだって出会うものよ。おはよ、ソアル」
そうした目に遭つたからこそこの今があると、複雑な気分で口にした言葉を占い師は一蹴して、そのとき丁度寢室の扉を開けた年下の少年に声をかけた。

「おはよ。何の話してたの？」

「ローゼのこと。本当はあたしがみつけたわけじゃないのよって話内緒だけどね」

ソアルは目を皿のようにした。一拍置いて、兄は気がつく。

「おまえにじゃないよ。他の人には内緒ってこと」

「……びつくりするじゃん」

「そんなところで仲間外れになんてしないわよ。でも、こっちが先ね」笑って指し示したのは、食卓に二枚しか出ていないパンの皿だった。ソアルはこくと頷いて、しかしそれよりもさらに先に洗面所へと姿を消した。席を立ったフアーリヤが弟の分のパンを切りにかかったので、そちらは委ねてソアルの兄は戸棚を開けた。

「あ、蜂蜜、なくなりそうだ」

「楓蜜にする？」

一瞬きよとし、理由がわかって手を振る。あれはソアルの冗談で、砂糖楓の煮詰めた樹液の方が、蜂が巣に蓄えた花蜜よりも馴染みがあるというわけではない。

頷けばこちらの希望に合わせてくれたのだろう。もし今日の知らせというのが母発見の報で、母が我が子と共に暮らそうと考え直すなら、新しい瓶を使いきることなく二人はいなくなるのだろうに。

「僕、買っておくよ。ヨナンさんの店にある？」

「ええ。あの人店閉めるの早いから気をつけて」

大したことでもないけれど、任されたのが何となく嬉しくて、うん、とユアルはにっこりした。

蜂蜜の瓶を手にヨナン氏の店を出て、間に合った、とユアルは安堵の息を吐いた。ソアルやローゼや他の子供たちと町の広場で球当て遊びをしていたのだが、鐘の音で閉店が迫っていることに気づき、一旦別れて飛んできたのである。買いそびれたところで特に怒らないだろうから、間に合わなくても明日の蜂蜜が足りなくなるだけのことだけれど、自分から言い出して代金も預かっておいて、忘れ

るのよろしくない。

一人で帰るとクイにさらわれるよ、とアマルス領育ちの子供たちは心配したが、親世代ほどの実感はないのだろう、強いて引き留めることもなかった。クイでなく人間にローゼがさらわれたことも知っているはずだけれど、無事に戻ってきたものだからやはり然程の恐れはないらしい。そのローゼは一人本格的に深刻な顔つきになったので、気をつけるよとユアルは安心させた。

約束を破らずに済んだのはよかったものの、このまま遊びに戻るのには難しいと今さら思いつく。瓶を抱えて駆け回るわけにも球を投げ合うわけにもいかない。家に置いてくるしかないだろうが、それから再び広場へ戻ってソアルたちと合流する頃には、そろそろ子供が家に帰るべき時刻になっているだろう。苦笑しながら少年は、仮の住処に足を向けた。

人気の少ない住宅街に入り、角を折れて人気のない道に出たときだった。聞こえてはいたのだろうが意識に上らなかった背後の足音が、急に速度を増したと思うや追い抜いて立ち塞がった。

頭の中が真っ白になった。

「搜したぜ。坊主」

「なんで……」

「黙ってついてきな」

左の手首を男がつかむ。弾みで落としかけた瓶を、ユアルの右手は慌てて持ち直した。

「弟に、会いたいだろう？」

背筋がすつと冷えた。反射的に上げた目は、口ほどに物を言ったらしい。勝ち誇ったような様子で男は歩き始め、手を引かれたユアルは今来た道を引き返す格好になった。

母を捜そうと町を出た二人に、馬車の中から声をかけたのは女だった。乗せてやりましょうよ、という声に応えてその後ろから顔を覗かせ、わかった、開けてやれ、と許可を出したのがこの男だった。人買いであることを隠さなくなってから、弟と一緒にいたければ

大人しくしていると、何度となく脅したのも。

わざわざ追ってなどこないだろうと、フアーリヤも言ったし、自分でも思った。二人にこだわる理由などないはずだった。捜すほどの執着など、いつの間に生じたのだろうか？

「……お願い、お願いだから」

少年は囁いた。

「どうしても、いいから……弟と一緒に、いさせて」

「そいつは心がけ次第だな」

心がけ。この先、従順に言うことを聞けば。恐らくまずはこの町から、平穩に出ていくことに協力すれば。助けてくれと、もし下手に騒げば。

騒ぎを起こしてこの男が捕まったとして、男の仲間にそのことが伝わるのと、既にその手中にあるのだろう弟に保護の手が回ると、どちらが早いだろう。前者の危険は万が一にも冒せない。尤もそんな風に考えて判断を下している余裕はなかった。ソアル——ソアルが。僅かと思つて、離れた間に。手を放すことさえ恐ろしかった、あの雪の夜の強迫観念を持ち続けていればと、後悔した途端にフアーリヤの顔が浮かんた。フアーリヤ。フアーリヤ、助けて。早く気がついて。

やがて人通りは幾らか多くなつたが、少年は隠れようとするかのように目を伏せた。道行く誰かに気に留めてほしいのに、自分から気を引くのは怖い。瓶を片手にとぼとぼと連れられる姿は、商品を盗んで捕まったようにでも端からは見えただろうか。馴染んできた町にも知らない人間は数多い。運よく知人が通りかかって、事態を察してくれるようなことは――。

「失礼」

聞き覚えのない声が二人を遮った。

「ユアル・イルムだな。そちらは保護者か」

「なんだおまえは」

「この者あるいはその弟が、我が主人が姉上に贈られたブローチを

盗んだ疑いがある」

思いがけない告発に顔を上げた。二人の前に立っていたのは、やはり見覚えのない青年だった。

「保護者なら——」

「いや、違うんだ」

呼び止められた男は慌てて言った。

「そう、俺もなんだ、こいつが持ち逃げしやがってよ。とつちめてやろうと思ってたとこなんだが」

憲兵の詰め所へ行くことだけは、何があっても避けたいのだろう。ようやく捜し当てたはずの獲物を妙に潔く諦めて、一刻も早くこの場を去るべく無関係であることを主張し始める。急ごしらえの言い分には多少の無理があつたが、相手は相手に不審も抱かないのか少年たちの嫌疑を説明していた。ユアルは混乱して立ち尽くす。主人姉。ブローチ。盗んだ？……って？

「そういうことならそちに任すわ。俺らはもう行くんでね」

「弟の方は見かけなかったか」

「いや、見てないな」

「——いるはずだよ！」

はつとして口を挟む。何がどうなっているとしても、そんなことは後回しだ。

「この人の……仲間のところに、いるはずだよ。そう言つて」

「誰がそんなこと言つた」

男の目がぎろりと動き、反射的にユアルは続きを呑み込んだ。が、しかし、このまま男が仲間の許へ戻れば、ソアル一人が連れ去られてしまう。それだけは——！

「さつさと連れてつてくれ。出任せ言いやがって、腹立つわ」

「じきに発つということだが、もしソアル・イルムをみつけたら連れてきてはもらえまいか。出立を遅らせる詫びと礼はしよう」

「おう。みつけたらな」

「だから！」

少年の叫びを黙殺して、青年はその手首を受け取り、来なさい、と命じて歩き出した。

人買いの男はそくさと離れていき、あっという間に路地かどこかへ消えた。青年が歩幅を合わせないために、望まぬ速足になりながらユアルは言葉を探した。

「違います、人違いです！ 僕はユアルで弟はソアルだけど、イルムって苗字じゃありません。苗字なんてないもの、僕たち」

「『イルム』は姓のない者の名に添える語だ。知れないのでなく、ないのだと明確に示すために。人の名を管理する者の間でしかまず使われないが」

何か場違いな気のする解説を、振り向きもせずに青年はよこした。「おまえをよく知ると言うようなら、そのように『ユアル・イルム』の名に違和感を覚えなくてはおかしい。保護者と言いつ張り場場合に備えて鎌をかけるつもりだったが、それは外したようだな。が、盗まれたと言った瓶を回収していかなかったのはあれの失敗だ」

角を一つ曲がると、そこで青年は足を止めて少年の手首を放した。少年は目をぱちぱちさせて見上げた。鎌？

「名乗りが遅れた。サグニート・エニユオだ。アラデシカ殿より君たちの母上の件を頼まれている。人買いの件も聞かせてもらった」間に存在する男爵令嬢をサグニは省略した。

「弟のことなら案ずるな。ロゼスカ・イルムに知らせを受けて、フアラデシカ殿が向かっている」

「……知らせ」

見知った女が見知った馬車へソアルを連れ込むのを目撃し、ローゼは半狂乱になって家へ飛び帰ったらしい。泣き喚く少女から聞き出した現場へ、居合わせたファリーヤは急行し、サグニはもう一人の少年を捜す方に回った。先ほどの告発も芝居だったわけだ。ローゼはローゼを連れて憲兵を呼びに走った。

「弟も気になるだろうが、今は憲兵の詰め所へ同行してほしい。誘拐の現場は押さえられようが、売買については証言が必要だ」

「はい」

顎を上げて、ソアルの兄はきっぱりと答えた。ファースリヤが助けに向かったのなら弟は大丈夫だと、根拠のない確信があった。

「話の続きを伺いましょうか、サグニ殿？」

刺々しいわけでも荒々しいわけでもなかったけれど、兄弟は顔を見合わせた。内緒話があるんですって、と言った口調や仕草の、どこがどうとは上手くは言えないけれど。

個室の四隅にサグニが置いた、中指ほどの高さの円錐は魔術の道具で、声が外へ漏れないようにする効果があるらしい。貸し切りにしておこうかという申し出を断ったから、サグニの後ろの壁の向こうには普段通りに客が入っている。ファースリヤがシエカに招かれるような高級店ではないのだから、個室といってもそのままで密談に向いているわけではない。それは、わかるのだが。

「ファースリヤ、怒っ……てない？」

「あんたたちを怒ってやしないわ」

ということは、怒ってはいえるということではないのだろうか。

サグニと共に赴いた詰め所で、ユアルは無事にソアルとファースリヤに再会した。憲兵が到着するまでの時間稼ぎに、占い師は馬車の前に立ちはだかって、拐かしぞ、と声を張り上げたらしい。気をつけよ。汝が子を放すな。凜とした声にぎよっとして振り返った人々は、やはりクイを連想したのだろうか。内容が内容なのだから私刑に発展する可能性もあっただろうと、渋い顔をした憲兵に注意されていたから。

リーゼにしがみついて震えているローゼもいて、連行されてきた一味を子供たちは確認した。めでたく一人残らずが捕まったことを見届けて、安心してリーゼの食堂へ引き上げてきたところなのだが……どうしたんだろう、ファースリヤ。

そんな疑問はけれども、サグニがテーブルの中央にことんと音を立てて置いたのが、松葉の意匠の指輪であることを見て取ったとき

に霧散した。母の持ち物が搜索に役立つと聞いて預けた、いなくなる少し前に母から渡された指輪。

父の形見だと聞いていたから、母よりも父を示すことになるかもしれないとは気づいていた。といって他に適当な品物も持っていなかったし、母が時々身につけることもあったから大丈夫だろうと思った。駄目なら駄目で——仕方ないと。

みつかった、のだろうか。

ソアルの右手がユアルの手をつかみ、左手が視界の端で服の胸元をきゅつと握った。弟の手を握り返して、青年の言葉を少年は待ち受けた。

「これはクイの血を引く家系の紋章だ。君たちにはクイの血が流れている」

——何て？

驚くのが怖がるのという前にきょとんとしてしまった。何て？

決定的な断絶を伝えられる覚悟はしていた。子供たちに用はないと、いらなから置いてきたのだと、突き放されたかもしれないとは。あるいはひょっとしたら、母でなく父にたどりついたかもしれないとも。……何か、全く違うことを、言わなかったか？

それから徐々に理解が及んだ。クイ。血を吸う魔物。——若さを吸う魔物。

ご覧なさい、とファアーリヤが鼻を鳴らした。

「クイの子孫だなんて言われても、クイが本当はどういうものなのかわたしたちは知らない。おまえたちは化け物だと言われたも同然なの」

「ファラデシカ殿はどこまでご存知なのです」

「あたしの知識は母譲り、母もほとんど独学よ。あの子からはクイのクの字も聞いたことないし。確信できるのは、母の実体験だけね。一緒になれないのがわかりきってるのに、心を奪われてその子供を産んだっていう」

一拍遅れて、少年は目を睜った。それが、母親の実体験と、いう

ことは。

フリーリヤは。じゃない、フリーリヤ……も。

「だからね。クイが人を惹きつけることはわかってる。惹きつけて、引き寄せて、取り込むことは」

アマルスの娘は目を細めた。

「わかってたんでしょう。この子たちが囹になること」

クイの血を引く少年たちに、人買いたちが惹きつけられたであろうこと。逃げたといって諦められず、自分たちの手で売ろうとせずにはいられないであろうこと。憲兵たちのただ中へ乗り込む破目になるよりは、見切りをつけた方がよいと考える判断力は残っていたようだけれど。

気づいていたのにそうと知らせず、誘き出すために危険に曝したのだろうと。

鼓動と呼吸が大きくなるのを、感じてユアルは静めようとした。

大人たちに聞こえてしまいそうだ。フリーリヤは——それを、怒ってたんだ。

「考えなかったとは言いませんが、確実性に欠けます。当てにはしませんよ」

確実性に欠けなければ辞さなかったことは暗に認めて、男爵家に仕える青年はしかし首を振った。

「誤解があります、ファラデシ力殿。クイの血を引く者全てが、クイの能力と性質を受け継ぐわけではない。父上には覚醒の兆しすらない。母上にどのようなお話になったかは存じませんが、クイの血による惑わしはお二人の間にありえません」

「……そう」

フリーリヤは唇を噛んだ。サグニは兄弟に目を移す。弟が身を固くしたのがわかって、励ますように兄はその手を握り直した。

「だが、君たちが素質を継いでいることは間違いない。現にあの者たちは君たちを追ってきた」

「あの人たちの心を奪ったつもりなんて、なかったけど」

掠れた声で答える。そんな恐ろしいことをするものか。

「能力でなく性質だ、意識的に操るものではない。そして——子供が若さを吸われた話は知っているか」

「……はい」

「あれは確かにクイの仕業だ。こちらは、意識的な」

青年は断定した。

「そこで——尋ねたいことがある。君たちの母上のことだ」

ソアルの指に力が入る。来た、と思った。

けれども告げられたのは、今度も想像とは違うことだった。

「居場所は、遠からず判明するだろうが。近くにいれば、クイの血に目覚めた君たちの犠牲になる可能性がある」

「あ……」

「搜索を続けるか、それとも——母上のために、やめるか。それを訊きたい」

守りたければ、近づかぬこと。主人が考えていたのと同じ論法を、サグニは用いた。

寒さの象徴のように白く色づく息が、掌に吹きかけると温かいのはどこか不思議な感じがした。隣りではソアルが手を擦り合わせた。り剥き出しの頬を押さえたりして冷気を凌ごうとし、その向こうではフアーリヤが片手に蜂蜜の瓶を下げて、軽く前後に振りながら歩いている。当たり前になりつつあった家路が、今は酷く尊く思えた。松葉の指輪はユアルの胸元に戻っていた。魔術で追いかけて、絞り込む段階は済んだ、この先は人の足の出番だと、サグニが置いていったのだ。みつけてもすぐには接触せずに、二人が答えを出すのを待つから、慌てて決めることはないとも言った。疑う理由は、少年には特になかった。

子供の指には大きすぎるそれに紐を通して肌身離さず身につけていたことは、人買いたちも気づいていただろう。売るときには取り上げるつもりでいたかもしれないし、見知らぬ男爵令嬢が思ったよ

うに、安物とわかっていて見向きもしなかったのかもしれない。父でも母でもなく自分のために存在する目印だから、離れていけない運命にあるのかもしれないと感じたのは、占い師の影響だっただろうか。

「ねえ、ファーリヤ。結局よくわからなかったんだけど」

「段階つてものを知らないのかしらね。事実と推測と憶測と希望的観測をちゃんと分けて話してほしかったわ」

理解力が足りないわけではないと娘は慰めた。

あの後にはちよつとした勉強会だった。クイの能力について、性質について、その継承と覚醒について、歴史について。ついていくのに精一杯で、自分が魔物の子孫であると知らされた衝撃に、ゆっくりに浸っている余裕もなかった。母親が魔物に誑かされた、無力で一方的な被害者ではなかったことを、真面目に説かれてファーリヤはいささか不満げにしていた。

一気に詰め込まれた知識の中から、ユアルは懸命に要点を選び出そうとした。四代以内に目覚めなければその先は無事だとか、そういうことはこの際どうでもよくて。

「クイって、取ったものを返せるって、言ってたよね」

「言ってたわね」

「それなら、そんなに怖くないんじゃないの」

「返せばね。怖いのは返さないとき」

予備知識があったためなのか、ああ言った割には把握しているらしい。

表現が適確でないから誤解を招くのであって、正しくは『借りる』とでも言うべきなのだと青年は述べた。血を吸うという話も吸血鬼との混同で、食料として奪うことはない。傷を負って血が足りなくなったときに、人から借りることはあっても。

借りる魔物、というのではどうにも迫力に欠けるけれど、近しい者ほど危険だという理由はそこにあるらしい。他人からよりも遠慮なく借りられるためと、急いで返さなくてもよいだろうという甘え

が生じやすいため。

「何十年か前、その血に目覚めたクイの子孫が、子供の若さを取り上げて返さなかったのは事実よ。そうしておいて平然と、のうのと生きていられる精神こそが魔物」

サグニが仕える家の者であつただけ、少年たちは聞いた。サグニが仕える直接の主人が、我が身我が血脈をそれゆえに厭い、忌み嫌い、恐れていることは、やり取りの端々から窺えた。

が、フアーリヤは肩を竦めて、そうは言うけどどうかしらね、と続けた。

「全員が全員そうなるわけじゃないっていうんだもの。普通そういうのは個人の問題って言うんじゃないの」

「そういうこと言うからわからなくなるんじゃないか」

ソアルの抗議にユアルも同感だつた。借りる能力に目覚めた者が返さない精神にも目覚めるとは、必ずしも限らないとサグニは確かに話していたけれど、おかげで判然としないのだ。恐れると言われたのか、恐れると言われたのか。

それはつまり、話し手の基本姿勢が一貫していなかったということであつて——正確な知識を公正に伝えようとする、自分自身に怯える必要はないと安心させようとする、母には再び近づかぬ方がよいと思わせようということ、クイの子孫が散り散りにならない方が何かと安心できるという計算、できることならシエカの望みを叶えたかつたという思い、それらが上手く折り合わなかつたためだつたのだろう。そんな事情など思いも寄らない子供たちは、膨大でわかりにくい説明だつたと受け取るしかなかった。

「じゃあ断言しておくわ。個人の問題よ。酷いことをして平気でいる奴なんて、人間にだつて珍しくないんだから」

魔物の血に原因を求めるのは責任転嫁だと、娘は思いなしかきつい口調になった。クイとして人を襲う可能性はある。が、クイとしてでなく刃物や鈍器で襲う可能性と、どれほどの差があるというのだろう。人を殺して、あるいは騙して、あるいはさらって売り飛ば

して、平然としていられる精神は人間も持ち合わせている。

それからふと我に返ったように額を軽く搔いたのは、言ってやるべき相手が違うと気づいたためらしい。だから、そこじゃなくてね、と繕う。

「サグニが一番言いたかったのは、多分こういうこと。一、世間が言うことには誤解も多いんだから、クイの血が目覚めることを闇雲に恐れなくてもいい。二、但しクイは悪い場合には、人間にはできないような取り返し of つかないことをする」

一本、二本と指を立ててまとめ、そこで——言い淀んだ。沈黙を誤魔化すように、伸ばした指をそつと折る。

「それで、訊きたかったのは、こういうことね。本当にあるとは限らないけど、あったとしたら大変な危険から、お母さんを守っておくかどうか」

ユアルは服越しにあの指輪を押さえた。父が残したと聞いた、魔物の血の証。

それからソアルが見えなくなったのに気づいて、振り返ると足を止めて地面を睨んでいた。片手は兄と同じように胸に当て、片手は握り拳を作って。

二、三步の距離を兄は戻った。と、拳がほどけ、縋るように腕をつかむ。

「ソアル？」

「そしたらさ。……そしたら」

思いつめたような顔を、少年は上げた。

「ファーリヤと、いられる？」

——そうなのだ。

応か否か、ではないのだ。母か、ファーリヤか。危険が現実にならないことを期待して母の許へ行くことを望めば、ファーリヤとは一緒にいられない。

わかりきっていたことだ。母の搜索の進捗を、だから自分からは訊かなかった。母に改めて捨てられるか、ファーリヤと別れること

になるか、どちらにしても辛い結論を早く知りたくなかったから。

たった一月で、天秤は釣り合っていた。——いや。

ユアルはそつと振り返った。数歩先でやはり立ち止まっていたフアーリヤは、二人をみつめてゆつくりと口を開いた。

「駄目って言ったらあたし、クイに憑かれなきゃいけないのよね」

数秒経って思い出した少年は目を瞠った。やり込めたともいうように、娘は笑った。

よく切り混ぜた紫のカードを、上から順にでも左から順にでも右回りに順にでもなく、跳んだり戻ったり重ねたりと複雑な順番で並べていく。きちんとは見たことがなかった占いの手順を、ユアルは膝に手を置いて、ソアルは身を乗り出して眺めた。

「あたしと仲のいい人がみんな、あたしのクイの血の魔力にやられたんだって言われちゃたまないけど。サグ二のご主人様は確かにそんな節があるわ。あの子結構潔癖だから、あたしみたいななんて本当は思いつきり嫌いそうなものだもの」

男爵の庶子は父の嫡子をそう分析した。

「そんなこと言ったらあの子だって同じでしょうけどね。あの子のために自分があれだけ奔走するのも、あの子のクイの血の影響だってサグ二はちゃんと思ってるのかしら」

人買いたちが追ってきたことから兄弟がそう判断されたように、サグ二の態度からその主人は、サグ二の主人の態度からフアーリヤは、やはり魔物の素質を継いでいると考えられるらしい。そんな根拠でいいのかなと、ユアルは首を傾げたが——そうあってくれた方が、寧ろ望ましかった。クイの奪う能力、それとも借りる能力は、クイ相手には効かないというから。クイ同士なら近くあることを恐れなくてもよいのだ。

理由は不明であるものの、又借りを防ぐためではないかと言われ

ているとか。それでいて『心を奪う』は効くのかとも思っけれど、尤もこれは『心を借りる』と言い換えられるわけでもない。別物であることは納得できた。

人に憑くこと、即ち体に乗っ取ること、正確には借り受けることは、実際クイにはできるはずだ。ファースリヤが持ち出したあの約束は、ファースリヤがクイならしかし成り立たない。だから、あれは口実だった。いいわよ、と答える照れ隠しだった。早まった約束をしてしまったから仕方ないという、本気で騙すつもりでもない、ポーズ。

ほら。ファースリヤは、そうだもの。そう言ってくれる。そう思っ
てくれる。そう、信じられたもの。

何よりの望みは弟と共にいることだ。売られるかもしれないときでさえ、弟と一緒にであるならば最悪受容できると思った。そしてその次が、今はファースリヤといること。天秤はたった一月で、反対側へと傾いていた。

捨てられたんじゃない。僕たちが選んだ。母さんじゃない人を。

「ああ、サグニっていったら、連絡しとかなきゃいけないわね。あの人には不本意な結果でしょうけど」

「えっ？　だって、サグニさんが」

「危険を鑑みて、やめろって勧めてはきたけど。一番の本音ではお母さんのところに帰したかったはずよ。……本当は」

連れていって押しつけて、シエカの要求を満たすこともできたはずだ。呑み込んだ続きはわかるはずもない。ただ、言いさしたファースリヤを少々不思議に思って見上げたばかりで——そのときには娘はカードを配り終えていて、行くわよ、と声をかけて二人の注意をそちらに向けた。紫の面を上位置に着いたカードのうちの、三枚をぱたぱたとひっくり返す。目の前に松葉が出たことにユアルはドキッとした。

「梅に、松に、桜？」

「……またわかりやすく出たわね。他にも言いようあるでしょうに」

「どういう意味？」

ソアルが急かす。呆れた様子の占い師は腕を組んだ。

「先に言っとくと、絵のイメージとはかけ離れるわよ」

「うん。で？」

「『魔物の巣窟』ですって」

一瞬冗談かと思った。

それから笑みがこぼれた。魔物の巣窟。クイの住处。

「ファーリヤもやっぱり一緒ってことだね」

三分の一が当てはまらないならそうは呼べないだろう。兄の言葉にソアルが目を輝かせる。魔物とわかって喜ぶなど、勝手かもしれないけれど。

「ごめんね、母さん。母さんを嫌いになったんじゃないけど、仕方ないんだ。僕たちは僕たちから自分を守る人のところにいるよ。

晴れやかな気分で、心の中で別れを告げる。誰が悪いのでも酷いでもない。自分とソアルは魔物の子孫で、ファーリヤもそうで、母はそうでなかったという、それだけのこと。

「そういえば、あの日の朝は」

ふと、ファーリヤは頬杖をついた。あの雪の日のこととすぐにわかる。

「『孤独の解消』って出たわ。誰が孤独よって話だけど」

そこに目をつぶれば当たってたわね。笑いかけられたのが、こそばゆかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7360p/>

魔魅の子孫

2011年8月8日03時31分発行